
コエナシ響の音探し

Ain零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コエナシ響の音探し

【Nコード】

N8759X

【作者名】

A i n 零

【あらすじ】

声が出ない訳ではないが、声が周囲の人に聞こえないという特異な体質の持ち主がいる。姓は音無―オトナシ。名前は響―ヒビキ。まあ、容姿に関しては可も無く不可も無く、成績に関しては割と優秀。欠点としては友人がいない事と声が誰にも聞こえない事。そんな彼が偶然出会った“自分の声が聞こえる人達”とのお話。

至らない点はたくさん、というか数多あるでしょうが生温かく御茶でも飲みながら見てくれると嬉しいです。

音声有り、されどミュート

本日快晴も快晴。

本当に雲一つ無い天気感動して、僕はすうっと息を吸い込んで肺を新鮮な空気で満たしていく。もう一度息を吸って、誰かが居るわけでもないのに「おはよう」と挨拶を試みる。

結果として、凜と空気を振るわせる声が出るわけでもない。ズシンとした重い声が出るわけでもない。

「――」

確かに僕は言葉をこの頭で考え、声帯を震わせたというのに紡がれた言葉は声にならない。

正しくは、僕の声は可聴領域に届かない高音。つまりは超音波に近いものらしく声として聞こえないだけで音としては機能しているらしい。

ああ、と僕は今日も落胆する。

僕は僕の声が聞こえる。理由なんて知らないが、僕には僕の声が聞こえる。

だが、ソレは僕に限った話であり他の誰かが僕の声聞くことは無いのだ。僕はただ口を動かしているだけ、そうにししか見えならしい。

僕が誰かに言葉を伝えるためにはメモ帳とペンが必須だ。

不自由にも程がある。

一体全体どうして僕はこうなのか？

その理由は僕を診た医者にだって分からないのだから、僕が分かるわけも無い。

今日も誰が聞くわけでもない声で小さく愚痴りながら、学校へと行く準備を始めていく。

勿論、教科書とノートの他に会話用のメモ帳を胸ポケットにしまうことは忘れない。以前にも何度か忘れた事があり、大変な目にあってかれは予備用も含め二冊以上は持つ様になっている。

淡々と作業をこなす傍らでふと「おはよう」と聞こえた気がしたが、気のせいだろう。

ここに住んでるのは僕一人。退くの声が誰にも届かない限り、僕に声が返ってくることは無い。

言葉は、聴こえて初めて意味を成すのだから。

つまり、僕のコレは声じゃない。音でも無い。ただの動作でしかないのだろう。

相手に意思を伝えられない声、誰にも聞こえない音に、一体全体何の意味があるというのだ。

自問しても質問しても、きっと誰も僕が満足できる答えなどくれはしないのだ。

いや、そんな答えがあるのかすら謎ではあるのだけど。

こんな僕が普通の高校生になれたのは奇跡に近いと思う。何しろ意思疎通の手段が文字を書く事でしかないのだ。当然の様に社会的には“障害者”の括りに入れられるだろう。

否定しきれない点も多くあるのだけれど、僕自身は声を出しているつもりなのだから心の底から納得出来る訳も無く、この二律性に苦しめられるのは既に数年の付き合いになる。

そんな僕には幾つかのあだ名がある。

高校二年生なのだから親しい友人から何かしらのあだ名は付けられるのは当然だが……悲しい事に良いものではない事だけは確かなあだ名だった。

僕の名前は音無響と言っのだが、小学生の頃のあだ名である声無し響かず、という名前とは呼べない文章が進化してコエナシと呼ばれている。

どこぞの映画には顔の無い方が出ていたが、僕はアレと同じ分類に入るのだろうか。

山犬とかの方が好きな僕としては少々不服なのだが、コエナシというあだ名はクラスだけではなく学年全体で通じるのでは？と思う程に広まっている為、修正は難しそうだ。

しかし、この名前はそれなりの利点が無いわけではない。僕のこの声の説明を初対面であっても省く事が出来るのはとてもありがたい。

一々説明なんてしたくないからね。

惨めだし。

情けない。

『ああ、もうやってられないなあ』

ぽつりと呟くものの、通学中の誰しも此方を振り向く事は無い。いや、普通に仲良くも無い奴の一人事に反応はしないだろうけれど。

それでも一瞥もされない、というのは中々にくる。

肌寒い5月17日。

真っ黒な学生服を着こんで、学校指定の鞆を携えた僕は今日も声無く一人愚痴る。

右のポケットには仲の良くない家族のアドレスだけが入ってる携帯を突っ込んで、左のポケットには結構新しいタッチパネルのウォークマン。

耳から聞こえるリズムに合わせて周囲を気にせずに歌を歌いながら、それでも誰も気にしない事で何時も通りに世界が回ってる事を確認する。

僕の声が誰にも届かない事を良い事に、意外と過激な歌詞を口ずさみながら登校する。

公立青峰栖鳳学校。名前だけは立派で中身は普通、制服の可愛さのお陰か女子に大人気なこの学校が僕の通う学校。

とりあえず青峰の制服を着てれば可愛い、とまで言われるのだから相当なものだ。男子の制服にだって工夫は凝らされているのだが、遠目に見ればどうしたって他と同じ。ブレザーで良かったと思うのは僕だけだろうか？

曲が終わり口を閉ざす。

その後は誰とも口を聞かないで教室まで行き、静かに席に着いて鞆から自宅から適当に持ってきた本を開く。何度も読み直しているのでページは何処だって良い。

時間さえ潰せればソレで良いのだ。

パラリとページがめくれる音は周囲の雑踏に溶けて消えた。

それと同時に不可思議な事象が起きているのだが――それは当の本人でさえも気付く事は無く、ただ時間は流れて行った。



彼、音無響という人間は周囲の悪意に負けない強い少年で、弱音を吐く事も無く力強く生きている、と思われている。

実は音無自身が思うほど、先生方及び学友からの人気は悪くは無い。

ただ、その特殊な境遇ゆえにコミュニケーションの第一歩である”会話する”事が困難であること、その行為を煩わしいを思っている

彼のことを思うと簡単には話しかけられなかった。

実際、彼は筆記で相手に情報を伝えることは嫌いだっただ。

ソレしかないからソレを使っているだけであって、他の手段——例えばタイピングなどの出来る物。タブレットなど——があれば、そちらを優先するだろう。

流石にいつでも文字を書くときに机があるわけではない。

文字が汚くなるということは、彼にとってはふざけた声と同意義であり、そのこともあってか音無は基本的には相手との付き合いの最中は表情や仕草で心象を伝えることを第一としていた。

その所為で、とまでは言わないが音無の表情は基本的に無機質だ。

感情を豊かに表すための対比として、彼は普段は表情筋をあまり動かさない。

どんな芸当だ。と思うかもしれないが、そのおかげで笑顔、怒り顔、顰め顔、それらに強弱をつけることが出来る。

音無響は苦勞人であり努力人だ。

それは彼のクラスの中では共通した意識であり、彼の為なら多少の無茶を飲み込むほどに彼と関わった人物達は様々な事を彼から学んでいた。

表情の大切さ、言葉を扱う幸福、そして何より肉体では無く心が強い事がどれだけ羨ましいか。

普通の学生、つまり惰性で日々を過ごしているのなら決して味わう事のなかったであろう、無情な程の敗北感を彼に関わった人物は知っていた。

故に、どれだけ見繕おうとこのクラスは二分化されるのだ。

彼を認める者。

彼を認めない者。

前者に共通するのは同情にも似た日々を過ごす彼への敬愛。後者に共通するのは障害に負けないその姿に自分の汚い部分を照らされたという錯覚。

『そう、どちらも上から目線だ』

大変だろう、と手を差し伸べる優越感が前者。

自分より劣っているのに、と筋違いな感情を抱くのが後者。

彼にとってクラスの仲間というのは、何処まで行っても他人だった。

仲良くしよう、という言葉の裏の感情を見抜く能力は既に高校生とは思えない程に成長してしまった彼は仲良くしたいと思える人物がない。

手を差し伸べる人物が友人同士で話す時と自分に話す時では全く別の空気を纏っている。

それが嫌で仕様が無いのだ。

実際、それは友人同士と顔見知り程度では対応が変わるのは当然なのだが、人付き合いの時間が恐ろしく少ない彼がその発想に至る事はなかった。

ある種、彼も子供でしかないのだ。

割と優秀、されど残念

■ ————— + ————— ■
友達がいないというのはイコールで放課後に余裕を産む事に繋がる、と僕は思っている。

斯く言う僕の場合は体験談の様な物なのだから、そう思う事に特に不思議な点は無い……とは言い切れないけど少なくとも僕はそう思う事に違和感など抱いてはいなかった。

まあ、つまりね。放課後を持て余しているんだ。

声が出ない故に家族間でも腫れ物の様な扱いを受けている。ソレを具体的に言ってしまうえば、超が付く程の過保護な扱い。

何かを言う前にソレを成しているという、怪物としか思えない母の能力あつての事なのだが。

『学校から帰ったら欲しかった新刊があつたときは驚いたなあ』

小説からマンガまで。彼が欲しいと心無しに呟いたことはあつても、書いた事はないハズなのに何故か母は購入していた。

正直言つて恐ろしい程に此方の意図を読み取るのだ。

故に帰宅という解答は最初から無い。

友人もいないので誰かと遊ぶという解答も消える。

結果、時間を持て余していた。

意味も無く本屋をうろつき、趣味でも無い衣服を見て歩き、時間を無駄に浪費していく。

ここでお金を使ってゲームを買ったりマンガ喫茶に入り浸ったりしない辺り、根の真面目さがうかがえる様な気がしなくてもないが現状を見るに素直に賛美できない。

音無響は全体的に残念だった。

様々な要因が重なったとしても、何と云うかそう行くか？という発想で自分からネガティブな方向へとスキップして行ってしまう様な

『さて、何しようか』

何よりも残念なのは、そのことに無自覚であるということなのだが。

いや、得てして残念な人というのは自分が残念である要因を深く理解していないものだ。ある種、典型的ともいえる。

残念なことに変わり無いが。

てくてくと意味も無く惰性で歩くその姿はまるで陽炎の様に不安定に見えるが、誰もそのことに気付くことなく、その横を通り過ぎていく。

それが群集という集団心理の結果なのか、それとも別の要因なのかは分からない。

だが、確かなことは、

『あ、猫だ』

彼も気付いていないということだろうか。

『路地裏……ね。まあ、広いし汚れないだろうから』

あまりに暇でゆっくりと猫の歩く後を追う響。普通なら猫が逃げてるはずなのだが、それは普通——つまり自分ではない他人——の人が言えることである。

もしかしたら響の横を通り過ぎていく人たちの様に彼の姿が認識できていないのかもしれない。

そんなことは露知らず、猫の入っていった路地裏をじっと見つめながら彼は色々と考察を始める。

幅、奥行き、衛生面……制服が汚れないように気をつければ猫の後を追っても大丈夫だ。

そう判断した彼は夕方と言うことも相まって仄暗い路地裏へとゆっくりと足を踏み入れた。ゆっくりなのは猫の歩幅と合わせただけで路地の暗がりには臆したわけではない。と、彼の体裁を気にして記しておく。

日の当たらない場所特有の湿った嫌な匂いがするが、それでも猫を追う事は止めない。

単に暇なだけ、と言ってしまえばそれだけだがそれでも彼は今この瞬間に限って言えば結構真面目。

どれだけ暇なんだ、と言われれば放課後全部。つまり睡眠時刻まで。そうして猫の後を追う事数分。

『あれ？』

曲がり角を曲がった時には既にそこに猫の姿はなかった。

『……隠れる様な場所はないぞ？』

路地裏、といっても狭くは無い。誰かが定期的に通っているのか足場の確保は出来ているし通路の中心は端と比べても汚れに差がある。だが、遮蔽物は無いので猫を急に見失う訳がないのだが、現に猫の影も形も何処にもない。

『んー、帰るか』

まあ、結局は所詮は暇つぶし。

見失ったのなら、それで良いじゃないか。と納得し帰宅という選択肢を選んだところで気付く。

『ここはどこ？』

実はかなり前から迷子だったのだが、目先の欲求に負けた所為で全く気付いてなかった。

そうして帰り道が分からなくなり多少涙目になりつつ彷徨う事更に数分。本格的に泣きそうな時になって小さいが人の声が聞こえてきた。

誘蛾灯に惹きつけられるかのようにそちらへとふらふらと引き寄せられる。

声がハッキリと聞こえる頃には表情も何時もと変わらない完全なポーカーフェイスになり、普段の調子を取り戻していたが、

「僕に何の用だ？」

「は？この状況で気付かない訳じゃないだろ」

「てかさ、お前が「ちょっと付き合えよ」なんてガラワリイ事言うからこんな場所になっちまったんじゃないか」

「俺の所為かよ……まあ、良いじゃねえか。ちゃんとこの子は付いてきてるんだし」

「……連れて来られたの間違いだよ」

三人組の男性と壁に背中を押し付ける様にして距離を取ろうとしている女性を発見。幾つかの考えが脳裏に浮かんでは消え、浮かんでは消え、

『さて、逃げよう』

反射的にそう言ったのは癖のようなものだった。

自分の声が誰にも聞こえない事を知ってから、癖。

『どうやって逃げよう』

『とりあえず後退』

「帰り道は適当に」

『迷ってもしょうがない』

『今ここにいるよりはマシ』

『助けない』

『他人だから』

『結論、逃げよう。躊躇う必要は無い』

自分の思考を口から漏らす。

頭の中でごちゃごちゃにしないで、一度言葉にしてしまえば納得出来るし暗示の様に自身に刷り込む事が出来る事を経験として彼は知っていた。

不条理ですら飲み込む為に行ってきた。

だからこそ、反射的にそう言っていたのだが、

「おい、そこでぶつぶつ言ってる人ー。助けてくれるとうれしい

な
ー
」

心臓が——止まるかと思った。

捕獲、されど登場

とつさに建物の影に隠れたのは良い判断と言えるのかどうか。

そんな事を考えていると背中を押つけた壁からドクンドクンと普段よりもずっと速く脈打つ命の音が聞こえてくる。

「……何か聞こえたか」

「いや、何も」

「ハッターかよ。ヤバ、俺ってば超チキン野郎じゃね。結構ビビってたんだけど」

周囲を見渡してからやや震える声で三人が次々と言葉を交わしていく。

こんな路地裏に女性を連れ込んだ癖に誰がいる、と聞いただけでこの有り様。あまり度胸がある奴等ではないのだろう。直感では無くそうであると見ていれば分かる。

だが、逆に言えば何をするか分からないという点では脅威を覚える。反射的に、カッとなって、そういう衝動に駆られた時に自分を抑制出来ない可能性はかなり高い様に思えた。

しかし、それはそれで矛盾が生まれないでも無い。

ここまで連れてきたのは先程の会話からして計画的な様に聞こえた。まあ、多少の失敗は有った様だけど、些細なモノだろう。

『逃げるか……どうする』

反射的に疑問を口にしたのは癖だが、その声は意識せずに小さくなる。

それほど先ほどの女性の言葉は衝撃的だった。

『さて、彼女に興味があるのは間違いない』

だが、癖というのはどうしようもなく自分の後をついてくるものだ。言ってしまう癖というのは自分の影。

『影は僕だ。声も出せず、何も成せず、ただ肉体の動くままに形を変える……って、何を言ってるんだ僕は。考えよう、どうしようかを』

思ふことを口にするのは癖である。だが、その言葉が音として周囲に認識されないままに十年以上生きてきた彼は既に慣習と言ってもいいほどに思考を口から漏らしてしまう。

「僕は嘔吐いてないぞ」

「はあ？まだ言ってるのかよ……さっさと引ん剥いちまおうぜ」

「ま、待って！変態さんは嫌われるよ！というか、さっきから訳の分からないことを言っていないで助けてよーっ！」

さて、どうしたものだろうか。

彼女の叫びはどう考えても僕に向けて放たれているように思えて仕方ないのだが、それはどう考えてもあり得ないのだ。

矛盾しているようだが——いや、実際に矛盾しているのだろう。

それでもそう考えずにはいられないのは、僕の中の常識が”僕の声は誰にも届かない”というのが大前提として成り立っているからだ。

『足下を崩される訳にはいかない』

『だから仮定しよう』

心の保健の為に、幾つかのルールをでっちあげる。

『あの女性は人じゃない』

無茶でも良い。

『だから僕の声が聞こえる』

無理でも良い。

『そう思え』

ただ僕がそう思えば大丈夫。

十年以上も続けてきたこの行為によって大抵の事は納得出来るし、暗示の様に自身に刷り込む事が出来る事を経験として彼は知っていた。

———そういうモノなのだ、彼女は。

頭の中で誰かが囁くと同時に”僕の中で彼女は人では無くなった”。

『よし、逃げよう』

さて、そうと決まれば初志貫徹と行こうじゃないか。

幾つかの言葉を呪詛の様に更に呟き、自身の中へと刷り込んで行く。ソレ等が全て逃避の為のものであり、たったの一つも目の前の女性を助けるといふ言葉も思考も割り込まないのは人として如何なものか。

兎にも角にも、彼の中で今この現状は不良さんに襲われる女性（人外）と必死に隠れる自分。という形で成り立っている。

客観的に見てしまえば外道でしかないが、彼の主観的に見てしまえば問題ない。

「ちょっと待っててばー！」

尚も叫ぶ女性を無視してまわれ右。右足左足を交互に動かす事三回、

「おい、待てやゴラァ」

頭の悪そうな声が背後から聞こえた。

「テメエ……何時から見てた。いや、それはどうでも良いな、ちょっとこつち来いや」

襟を思いつきり引つ張られ息が一瞬つまる。引かれた勢いで後ろへ

とたたらを踏み、自然と女性の隣へと追いつめられていた。そして退路を塞ぐように僕達を囲む三人。

『……判断を誤ったか。もっと早く逃げるべきだった』

「それは私に失礼じゃないかなあ」

『というか、どうして君は僕の声が聞こえるんだ？』

「それってどういう……」

彼女が疑問を口にする前に丁度目の前の男が僕の顔を見て、にやりと笑う。

「あ、どっかで見た事あると思ったらお前コエナシか。さっきから金魚みたいに口動かしてるから何してんのかと思ったよ」

「こえなし？」

「何だ、お前は知らないのか？ま、俺も詳しくは無いけど声が出ない病氣らしくてな。音無しって名字と合わせてコエナシって言うんだよ。ここらじゃ有名だよなあ、コエナシ」

『全く不本意ながらね。いや、便利ではあるんだけど』

「……ま、喋れないんじゃないかな話しかけても意味無いか」

僕の言葉はやはり当然の様に無視される。やはり隣のこの女性が”可笑的”と見るべきだろう。

この”普通さ”に違和感を覚えたのか訝しげに此方を見る女性と視線を一瞬合わせるものの、直ぐに外し周囲をそれとなく確認する。

あまり運動神経のよくない僕が逃げ切れる可能性は相当に低いだろう。……本当にどうしようかな。

「というか、君たちは僕に何の用なの？こんな場所にまで連れ込むんだから色々と要件があるんでしょ」

「その通り。正しくはお前じゃなくて、鬼道―キドウの妹のお前に用事があるんだよ」

「兄さんに？……そういう事ね」

「理解が速くて助かる。このままお前さんには人質になってもらうぜ」

ニヤニヤと笑うその姿は自分の優勢を確信して疑わない。

『上から目線かよ』

僕が一番嫌いな目線だ。自分がこの状況で一番偉いと思っている、嫌な目付き。

そう思っても彼はその苛立ちを表面にはおくびにも出さない。まるで能面の様な無表情の仮面を張り付けたままである。

美しい訳でも無いその顔立ちに深々と冷え込む冷たさと狂気を感じた不良達は一步退いた。

だが、その事実には目を瞑り―あるいは無意識の内の行動故に気づかず―不良達は自身の優勢を誇示するためにもう一度同じ事を言う。「俺達はお前の兄貴に用がある」と。

「はあ、悪い事は言わないから兄さんには突つかからない方が良いでしょう?」

「うつせえ! 鬼道の野郎には一度痛い目に在って貰わないとコツチの腹の虫が収まらねえんだよ!」

「結構な恥かかされたからねえ」

「ま、諦めてくれよ……えーっと、呉羽ちゃん」

「こんな卑怯な人達に僕は名前を呼ばれたくないな」

「うわお、流石鬼道の妹さん。氣イ強めでかつわいいね。こういう娘を泣かすのって超楽しくない?」

「痛ー、この人発現が超痛い」

「ほっとけ、ドSなソイツが悪い」

優勢という事を思い出してか空気が相手を包む空気が弛緩しているのが見て取れた。現に犯罪ストレスの状況でありながら饒舌になっているのが良い証拠。

ドSかそうでないか、で盛り上がっているのは確かに時間稼ぎとしては好都合。意味があるかは分からないが、妹を人質として取るくらいだ。きつとこの娘にはそれだけの価値があるのだろう。

『ってか、コイツ自称ドSなのにコイツの兄貴に負けたのか……残念な奴』

僕がそう思うままに感想を漏らすと女性は楽しそうにクスリと一度だけ笑った。

ソレを僕が彼女が一度そうした様に訝しげな視線をぶつけると、驚いたのかその笑顔は直ぐに消えた。

そうして彼女を一瞥して数分。

「よお、楽しそうじゃねえか」

完全に下ネタで盛り上がり始めた不良達がピタリと動きを止めた。

「俺も混ぜろよ……な？」

赤黒い短髪は針の様、目つきは厳しいが口角は歪み微笑を浮かべていた。

路地裏でも目立つ赤いダウンジャケットが印象的なその人物が誰かは……目の前の不良達の動きが止まった事から検討は付く。

「鬼道……どうして此处に!？」

『そうか……コイツがコレの兄か』

「コレって言ったね!僕の名前は不本意ながらさっき知ったよね!」

はて、そうだったかな？

「くそう、自己紹介くらい自分でしたかったあ……」

さて、落ち込む彼女……いや、お兄さんが来たんだし妹さんと呼ばせてもらおう。妹さんさておくとして、目の前の男。つまりお兄さんの動き方を良く見ないとね。

『逃げるタイミングは逃さないようにしないと』

確認の為にそう言ったただけなのだが、落ち込んでいた表情を引き締めた辺り妹さんは忘れていたのだろうか。

もしくは、その考えを持たなくても良い程に颯爽と登場したお兄さんが強いのか。

どっちだろうね。

利用、されど不審

さて、逃げようと思ったのだが如何せん問題が生まれていた。

お兄さんは妹の近く不良が、不良達は妹さんを人質にしようにも僕がいる。

現状ではコレが最善と判断して彼女の前に僕が出てきたのだ。正直言つて守るつもりなんて欠片程もなかったのだけれど、僕達の切り札はお兄さんだ。

お兄さんの動きを止められたら危険な事に変わりは無い。人質だしね。

だから、僕はすっかり忘れていた。

お兄さんからしてみれば僕だって敵かもしれない状況なのだ。そして彼女を庇う様に前に出ている状況は逃がさない様にしている様にも見える。

そう、お互いが動けない状況を僕が作ってしまった。

下手に僕が無害な事を伝えようものなら、不良達は無理矢理にでも僕を引きはがしにかかるだろう。

ああ、どうして僕は前に出てしまったんだ。

最善？いや最低だぞ。

しかもどうして妹さんは僕の制服の裾を握ってるの？逃げられないじゃないか。

『さて、どうしようか』

墓穴を現在進行形で掘ってしまっている僕が出来る手段は幾つあるだろうか。

『一つ、ゆつくりと妹さんを前に……ごめん、痛いから抓らないで』
最初の提案がコレというのもどうなのだろうか？とは思ったけれど、本当にこの妹さんは僕の声が聞こえているらしい。

『あれ、そういえば』

そうすると幾つか出来る事がある。

”普通”は聞こえない僕の声が聞こえる”可笑しな”妹さんのお兄さんなら……もしかして僕の声が聞こえるかもしれない。

心臓が高鳴る。

そう意識すると全身の血液の廻りすら理解出来るくらいに自分が興奮してくるのが分かる。

”可笑しい”人達相手に何を思っているんだ。と自分を叱咤するも、声を聞いて貰えるという嬉しさは隠しようが無い。

急に喉が渴いてきたけどソレは無視して、

『お兄さん、僕の声が聞こえますか？聞こえたら左手を開閉してください』

そう言うとお兄さんは一瞬驚いた表情をしてから左手を一度大きく開いてから――閉じた。

『よし、それなら手の打ちようもある』

不良達が混乱して視線をお兄さんに固定しながらも話し合っている今がチャンス。

『お兄さん、今から僕から見て左の人を、妹さんは右の人をお兄さんに向けて付き飛ばします。そしたらその二人を倒してから、もう一人を倒してください』

無茶かもしれないが、少なくともこの不良三人では困んでも負ける判断したからでこそのこの状況だろう。

ならきつと、お兄さんは強い……はず。

『よければお兄さんはもう一度手を開閉。妹さんは優しく抓ってね』

ニヤリと楽しげに笑みを浮かべつつお兄さんは手を開閉させ、僕の腕には小さな痛みが走る。

『では、すぐさま実行と行きます』

ゆっくり体制を変えて行き、

『3、2、1――今！』

僕と妹さんが同時に動く。

不意を付く事には成功したらしく不良達が反応する時には僕達は既に行動に移っていた。

僕が付き飛ばした不良は勢いが強すぎたのか反対側の壁に叩きつけられ、妹さんの付き飛ばした不良はお兄さんの前に。

「ちょ、待て!？」

「うらア！」

しっかりと握られた右拳をかわそうと不良は身体を捻るが、その一撃は右肩に直撃し反動で上体が後ろに反れた。

先程は合図に使っていた左手はしっかりと握りしめられ、隙だらけになった顔面へと吸い込まれた。

殴られた顔から白い何かが空を舞う。

それをぼんやりと見ている暇はない事を彼はしっかりと理解していた。

現状、一人撃破したものの相手はまだ二人も残っている。

そして二人の内の一人は僕が付き飛ばして距離はとったけれども、もう一人は付き飛ばした僕のほぼ背後にいる。

だからこそ、この混乱している今しか僕にチャンスは無い。色々

溜まっている日々の鬱憤をパワーに変えて、右足を背後へと向けて振り抜く。

僕の奥義——素人流・回し蹴り。

威力は最弱、効率は最低、牽制としても成り立たない。下手したら体制崩して転倒するというオプション付き。

さっきまでの囲まれた時に放っていればきっと僕は袋叩きにあっていたのだろうけど、

「——ッ！コエナシ！」

それでもその一撃で怯むほんの一秒程度の間があれば問題無い。

お兄さんに倒され地面で悶える不良を飛び越え、僕が付き飛ばし壁に叩きつけられていた不良と交戦中のお兄さんの隣を通り抜ける。

「サンキュ、助かったよコエナシ。また後でな」

『どうも！』

その際にお兄さんからのお礼を頂戴しつつも全力疾走でその場を後にする。

『よっしー！よっしー！よっしー！』

馬鹿みたいに同じ事を叫びながら僕はその現場から逃げ出した。

後ろからは悲鳴と怒声とうめき声が聞こえてきたけど、まあそれは

僕には関係ないことだしね。気にすることに意味は無いし、生産性も無意味。

如いて言うならどうして彼等は僕の声が聞こえたのだろうか？

その一点に関してはどうしようもなく気になるけれど、別に今までコエナシで生きてきたんだ。

今更になって声が出来るといふのはむしろ怖くてしょうがない。

彼等に僕の声が聞こえた時は嬉しかった。けれど、聞こえなくなるかもしれないと思うだけで僕は逃げ出したくなるくらいに怖くなる。

だから、もう良いんだ。

僕の声はきつと死ぬまで僕しか聞こえないんだろう。

今日は夢のような何かだと思って忘れよう——泡沫に揺れるそんなものだろう、と忘れれば良い。

……あれ？お兄さんってば「またね」って言ってなかった？

■ ——— ——— ■

路地裏から抜けてようやく落ち着いたのか大きく溜息を吐いた呉羽へ優しい笑みを浮かべる。

「無事が呉羽」

「うん、大丈夫だよ。兄さんこそ大丈夫？さっき殴った時に歯が飛

んでたみたいだから手に怪我してない」

「心配してくれるのは嬉しいが、この程度なら意味無い事は知ってるだろ？」

「まあね……それにしても兄さん、あの人達に何したの？」

その言葉に笑みが強張るのを自覚しつつも、呉羽に嘘は付けないので正直に自白する。

「話し合い」

「……はあ、そんなことだと思っただよ」

先程とは違う性質の溜息を吐いた呉羽が見るからに意気消沈しているのを見て、多少の罪悪感を覚えるも今やるべき事が別にあることを彼は理解していた。

「なあ、呉羽。さっきの男なんだが」

「ん？ああ、こえなしさんのこと？本当に偶然会っただけだから喧嘩とかしないでね」

「わかってるよ。ただ、俺もコエナシに関しては色々な噂を聞いていたけど……まさか此処まで凄いとは」

心底驚いてるらしい兄を見て、困惑する呉羽。

「あの男の声はたしかにあの不良共には聞こえていなかった。だけど俺達には聞こえた」

「そうなんだよね。僕もびっくりしたよ………に、兄さんさ、それって」

「そう、もしかしたらアイツは俺達の言葉を扱ってる可能性がある」

「で、でも！それは可笑しいよ！だってこえなさんはどう見ても人間だったんだよ」

「ああ、だから俺も驚いてるんだ。外見も、魂も人間なのは間違いない。俺達が同族を見違える訳無いからな。なら、アイツは一体何だ？同族同士では言葉を交わせず、俺達とは言葉を交わせる……少し調べる必要があるな」

何時になく神妙な表情の兄に事の重大さを知った呉羽は再び小さく溜息を洩らす。

「わかった。私が今度こえなさんには会いに行くよ」

「……え？」

「何か問題あるの？」

呉羽が覚悟を決めてそう言つと兄が一拍置いてぎこちない動きで此方に振り向く。

「ま、待て。どうしてお前が行くんだ。俺で良いだろ、俺で！」

「だって兄さんってばここ等辺じゃ有名な不良さんでしょ？」

「そ、そうだけど」

「それにこえなしさんは青峰栖鳳学校でしょ？私の学校の方が近いじゃない」

「どうして知ってるんだ！？まさかその学校に気になる人でもいるのか！畜生、何処の犬畜生だソイツは。拳で話し合って相応しいか見極めてやる」

暴走し始めた兄を止められるのは家族だけだと知っている呉羽は呆れつつも兄の手を握る。

「く、呉羽？」

「兄さん、ちゃんと聞いてね」

じつと目を見つめ諭す様に話しかける。

「私がこえなしさんの学校を知ってたのはあの学校の制服が可愛いからで他意はないの。……残念だけど、好きな人だっていないしね。兄さんこそ気になる人はいないの？」

「そ、そうか。気になる奴がいらないなら良いか……ん、良いのか？まあ、良いか。因みに俺は気になる奴はいないな、断言しても良い……誰も近寄ってこないし」

「兄さん……喧嘩止めようよ」

「はあ……出来たら苦労しねえよ」

呉羽に変わり溜息を吐く兄の背中には心なしか小さく見えて、なんとなく可愛いなと思った呉羽は笑いながら繋いでいた手を引いて帰路へつく。

妹に励まされた事に気付いた兄は少々不満そうではあったが、抵抗することもなくそのまま成されるがままに歩く。

――縁は結ばれた。

黒猫はソレをみて音も無く笑い、消えた。

利用、されど不審（後書き）

更新が遅い所為か、それとも力量不足か。誰も見てくれない気がする。

おお、ネガティブになりそうだw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8759x/>

コエナシ響の音探し

2011年10月31日03時02分発行